

奉神礼基礎講座 7 『八調で歌う 入門1』 神の使い

「聖歌は音楽だ」と思っておられる方、多いんじゃないかと思います。確かに音楽なんです、私たちが慣れ親しんでいる近代的な「西洋音楽」とは、考え方の根本的なところが違うということは押さえておく必要があります。音楽の素養や技術はとても役に立ちますが、西洋音楽の考え方をそのまま正教聖歌にあてはめると、聖歌練習がただの音楽訓練になってしまったり、奉神礼がどこかに行ってしまうたり、楽譜に書かれた音楽や過去の形式を守ることによって縛られて、難しい、歌えないと嘆くばかりになったり、奉神礼の「息」の根が止まってしまうことになってしまいます。

このシリーズでは、正教会の古い伝統である「八調」のワザを紹介しながら、正教会の柔軟で、変幻自在な伝統を学んでゆきます。

さて、今日は、「むずかしい」と言われるパスハのイルモス、特に「神の使い」を簡単にする方法をご紹介します。カンタンにするって、勝手にいじっちゃっていいの？と心配になる方もあると思いますが、「大丈夫」な理由もご説明します。



「神の使い」、墓地祈祷、会合や食事の終わり、復活祭期に頻りに歌われますが、「むずかしい」「なんか変」と思っておられる方、多いんじゃないかと思います。

Slide 2

なぜ難しいのかを分析します。理由の1. 臨時記号がたくさんついているから（この赤丸、青丸です）。これを正しい音程で歌うのは至難の業です。で、みなさん適当に歌っておられる。なんとなく似たような、似てないような歌ですが、楽譜通り正確に歌われていることは、まずありません。



この臨時記号のうち、青丸はロシア聖歌の伝統の音階、（専門用語でテトラコードというもの）なので、はずすことができませんが、赤丸の方は合唱にするときに付け加え

られたもので、もともとの単音聖歌にはなかったものだから、はずして、歌いやすくすることができます。

日本で一般に単音聖歌として歌われる歌は、大半が、明治時代、ロシアで歌われていた四声の楽譜のアルトパートから旋律を取り出しました。合唱で、和音として響かせるために音を変化させてあります。四つの音として演奏されたときには美しくても、そこだけ取り出すと、摩訶不思議な音の動きになります。「神の使い」はその典型的な例です。

結論を言うと、和音を作るためにつけた臨時記号の音をもとの音に戻せば、だいぶ歌いやすくなります。

「神の使い」をカンタンに
1. 臨時記号を外してみる



かみの葉 いくしみをみちむるものに見
でいお く いさぎよき聖歌やよ ら ち べ
よ また語うよ ら ち べ へん じの 子 三 日 目 に ち

Slide 3

歌ってみる

Slide 4

理由 2。ふたつめの理由。正教会の聖歌の伝統ではなく、楽譜として書かれたものから日本語聖歌を作ったからです。

日本では聖歌は音楽だから楽譜どおり歌わねばならない、と思っておられる方が多いですが、楽譜は西洋音楽の思想に基づいて作られたものなので、正教聖歌の原則とは相反する点があります。この違いを押さえずに一般の音楽の原則を持ち込むと、本来の目的を見失ってしまいます。

近代西洋音楽は、器楽をベースに発展し、基本的に音楽優先です。作曲家は演奏家にどう演奏して欲しいか、音の高さだけでなく、強弱や表現方法を細かく楽譜に指示します。五線譜はそのツールとして発展しました。

しかし、正教会はことば優先です。五線譜を利用して書かれていても、根本的な考え方が違います。楽譜は絶対ではありません。基本は師匠から弟子に伝えられる聞き覚え、教会で聞き、一緒に歌う中で伝えられてきた聞き覚えです。楽譜は聞き覚えの補助として使われます。

正教会では聖歌の目的は、ことばによって正しい教えを伝え、正しい讃美を行うことにあります。音楽はことばをのせる容れ物です。容れ物は機能を果たすことが第一で、容れ

むずかしいのは飾り部品



かみの葉 いくしみをみちむるものに見
でいお く いさぎよき聖歌やよ ら ち べ
よ また語うよ ら ち べ へん じの 子 三 日 目 に ち

飾り部品

物が豪華かシンプルかは二次的なことです。西方では容れ物が独立して発展し、人の楽しみとして演奏会で提供されるようになりました。

正教会でも 19 世紀以後コンサートで聖歌が歌われることも行われるようになりましたが、基本は教会で奉神礼の一部として働きます。だから容れ物である音楽が豪華な四部合唱であっても、素朴な単音聖歌であっても、働きに違いはありません。

伝統聖歌でも、たとえばビザンティン聖歌やロシアの古いズナメニイ聖歌では、同じ歌を、熟練の人は技巧を凝らして飾りをつけて歌う、初心者や素人はシンプルに歌います。いろいろな段階が用意されています。聖歌の匠、マエストロとは豪華な飾りをつけて歌える人でした。

さて、神の使いの「タラララリララ」というところは飾りです。復活祭は大きなお祭りだから、飾りをつけたい、でも、所詮飾りだから、難しいなら、外してもいい。ということになります。これを外すとだいぶ楽になります。どういう仕組みになっているか、を解説します。

Slide 5

正教聖歌には「八調」という歌作りの基本システムがあります。ギリシア語でオクトエコス、ロシア語でオスモグラシエと言います。八調とは、平たく言うと、メロディの型、部品を集めた八つのセットです。八つのセットには、メロディの型となる部品がいろいろ入っています。聖歌者は、祈祷書の「何調」という指示を見て、その調の袋の中から部品を取り出して、祈祷文にあわせて組み合わせて歌を作ります。



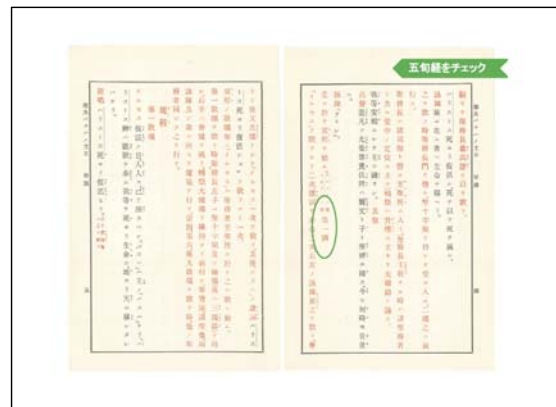
祈祷文をみながら 1 調なら 1 調の部品を組み合わせて歌う、ロシアでもギリシアでも、聖歌者となる人が最初に身につけるべき基本技能です。残念ながら日本の場合、この技術が全く教えられていません。

日本の場合、すべて楽譜に書いてあるものを歌いますが、これはニコライさんが明治日本の特殊事情に配慮して行った、特例です。

SLIDE 6

八調について、詳しいことは、これから追々時間をかけてお伝えするとして、今回は復活祭のイルモスに注目します。

祈祷書を見てみましょう。復活祭は『五旬経』という祈祷書に書かれます。祈祷書見て確認することも聖歌者の仕事です。聖大パスハの主日、早課、カノン、イルモスとはカノンの最初に歌われる歌です。ここに、1 調と書かれていますから、1 調イルモスの部品で歌います。



Slide 7

復活祭のイルモスにもいろいろな伝統がありますが、多くの場合「パスハリヌイ」(パスハのという) ととてもシンプルなメロディで歌われます。これはロシアの「八調」教科書ですが、1 調イルモスのひとつにパスハリヌイが出ています。



パスハリヌイのメロディはとてもシンプルです。弾く

①、②がなんども繰り返されて、フレーズの終わりに③がきます。piano

スレチェンスキー修道院の歌を聴いてみましょう。聴く

▶Sretenskii monastery

日本のものも原則は同じです。日本の単音からパターンを拾ってみましょう。

Slide 8

基本はこの三つの繰り返しです。このメロディを覚えて、祈祷書を見て、祈祷文を区切って、あてはめて歌います。



Slide 9

たとえば、後半「新たなるイエエルサリムや光光れよ」のメロディパターンはこうなります。

この三つのメロディパターン、部品が、基本部品です。これを繰り返せば、シンプルなバージョンができます。

7. 八調入門 1 神の使い (2021年5月)

祈祷書を見ながら、この繰り返しをあてはめて歌っていただければよいのです。その方が、楽譜と音符を見てマゴマゴするより、ことばの意味がわかるし、さくさく早く歌えます。ロシアの祈祷書にはことばの切れ目にスラッシュ、アクセント位置が書かれているものもあります。祈祷書見ながらいくらでも歌えます。

Slide10

「神の使い」の前半をもう一度見てみましょう。基本パターンの三つの中に、赤丸で囲んだ部分があてはまっています。これは「飾り」です。「装飾部品」です。古い聖歌の伝統では祝祭性、祝いの気分を高めるときには、大きな装飾を付け加えました。

Slide11

これは、18世紀の楽譜、ロシア聖歌合唱になる前の昔からの単音聖歌を五線譜に書き換えたものですが、赤丸で囲んだ部分が飾りです。飾りは「恩寵を満ち蒙るもの」、「慶べよ」「復活」などの重要な語についています。

飾りの部分は聖歌者の腕の見せどころでもありました。熟練の聖歌者は技巧を凝らした飾りをたくさん覚えていて、自由自在につけて歌うことができる人でした。上手な人が歌った装飾が記号で記録され、のちに楽譜に書き写されました。

飾りをまだ上手につけられない初心者はシンプルに飾りなしで歌います。それでも十分です。飾りをつける、つけない、は技量によって、状況によって変えられることです。だから、歌いにくいなら、「飾り」は取ってかまわないのです。それは正教の伝統から見れば、普通です。

ついでに申し上げますが、同じことはハーモニーについても言えます。合唱のハーモニーもあくまで「飾り」です。つけてもいいですが、絶対必要ではありません。是が非でも三度のハーモニーをつけなければ、と頑張る方がありますが、聖歌の機能としてはユニゾ

Канон, глас 1
Песнь 1

Ирмос: Воскресения день, / просветится людем: / Пасха, Господня Пасха! / От смерти бо к жизни / и от земли к небеси, / Христос Бог нас преведе, / победную поющия.

復活の日/人々よ/己を照すべし、パスハは主のパスハなり、ハリストス神は/凱歌を奉る我等を/死より生命に/地より天に/移したればなり。
附唱) ハリストス死より復活し
感覚を浄めて/復活の近づき難き光にて/輝くハリストスを見、凱歌を奉りて、慶べよと言ひ給ふを明に聞くべ
附唱) ハリストス死より復活し
諸天は宜しく楽しむべし、地は歓ぶべし、見ゆると見えざる世界は祝ふべし、永き樂なるハリストス/起き給ひしに因る。

むずかしいのは飾り部品

飾り部品

「神の使い」 18世紀の楽譜

ン、斉唱で十分です。飾りはあくまで飾りです。

Slide12

さて、飾りの部品を外して、3 つのパターンだけで歌ってみましょう。祈祷文を区切って、三つのパターンをあてはめます。音の動くところにアンダーラインを入れます。

矢印などでもいいでしょう。

言葉の区切りや抑揚によって、多少微調整をします。歌うところになります。(歌う) カンタンでしょ？

3つのパターン

- ① 神の使い 恩寵を満ち被る者に 籲びて白えり、
- ② 潔き童貞女よ、慶べよ、
- ③ また白ふ、慶べよ、
- ① 爾の子 三日目に 墓より復活し、
- ② 死せし者を 起こせり、
- ③ 人々よ、美しめよ。

Slide 13

ここでひとつ、私の「こだわり」をお話しします。それは、できるだけ祈祷文どおりの歌詞を用いることです。なので、いま歌われている楽譜の歌詞とは少し異なります。

楽譜の歌詞には初期の古い、初期の翻訳が残っています。ニコライ大主教は少しでも正確な訳を求めてなんども改訂をしていますが、一旦楽譜に書かれて歌われたものはいまだに積み残しになっています。楽譜印刷は文字だけよりもずっと手間がかかるし、また、一旦歌い慣れてしまうと、変えたくない、ということもあるでしょう。また、音楽として美しければそれでいいじゃないか、という意見もあるかもしれません。

ただ、それでも、正教会の聖歌は BGM や愛唱歌ではなくて、教義を正しく教えるものですから、少々大変でも、正確な歌詞で歌う努力を続けるべきだと思います。

こうして音楽付けするときに、日本語として、聞いて通じるように、歌詞の意味が伝わるような音の配置を心がけます。キーワードとなる大切な言葉がひき立つようにします。ロシア聖歌では重要な言葉には動きのある音、長い音があてはめられています。古い聖歌では、神、光、ハリストスなどには高い音、地獄、罪などの言葉には低い音があてられているそうです。

先ほどの「飾り」も、「恩寵を蒙る」「慶べよ」「復活」などの重要なことばにつけられています。

かんたん 神の使い(五句標準拠)

- ① 神の使い 恩寵を満ち 被る者に 籲びて 白えり、
- ② 潔き童貞女よ、よろこべよ、 また白ふ、よろこべよ、
- ③ 爾の子 三日目に 墓より 復活し、
- ② 死せし者を 起こせり、 人々よ たのしめよ。

日本語は音節数が多いし、ロシア語とは語順が違うので、重要語をねらって「タラララリラリラ」をあてはめるのは難しいですね。私は、日本語の場合はあまり飾りをつけない方がいいのではないかと思います。飾りのメロディをつけることで、意味がわかりにくくなることもあるからです。

でも、少なくとも、ことばの抑揚に自然な音楽付けを心がけたいと思います。

Slide 14

後半も見てみましょう。①、②、②、①、③とあてはめてみます。

Slide 15

楽譜に書くところになります。

Slide16

シオンよ～という部分を、シオン、つまりエルサレムの丘のことですが、シオンへの呼びかけという感じ、今まで歌い慣れたメロディを取り入れて、こんな風にすることもできます。

「楽譜は書かれたとおり」という性質を持ちますが、正教会伝統の八調の歌い方は、大枠は決められているけれど、細かい配置や飾りは担当の聖歌者に任されています。いろいろやってみてください。こういう考え方は、イコンや聖堂建築、奉神礼のやり方などにも共通しています。

作曲者や編曲者がガッチリ決めて、それを楽譜に正確に記録して、楽譜のとおりに再現するのではなく、大枠が決まっているけれど、任された者が、状況に合わせて調整する、そこに聖神が働くというのが正教会伝統のスタイルです。

3つのパターン

① 新たなるイエルサリムよ、光り光れよ、
 ② 主の光栄 雨に輝きたればなり、
 ② シオンよ、今祝ひて楽しめ、
 ① 雨 涙き 生神女よ、
 ③ 雨が生みし主の復活を喜び給へ。

① ②

あらたなるイエルサリムよ 光 光れよ、 主の光栄 雨に
 輝きたればなり シオンよ、今祝ひて 楽しめ
 ① ③ 雨 涙き 生神女よ、 雨が生みし主の復活を 喜びたまへ。

① ②

あらたなるイエルサリムよ 光 光れよ、 主の光栄 雨に
 ④ 輝きたればなり シオンよ、今祝ひて 楽しめ
 ① ③ 雨 涙き 生神女よ、 雨が生みし主の復活を 喜びたまへ。

Slide 17

祈祷文を見ながら八調で歌うという伝統の方式は、聖歌者自身の祈祷文理解を深めるという効果もあり、思いがけない発見があります。

今回も、新たに気づいたことがありました。それは「また言う、よろこべよ」というフレーズです。いままでただの「念押し」だと思って、何気なく「また言う、よろこべよ」と歌ってきたけれど、「また言う」というのはとても重要な意味があることに気づかされるという体験をしました。



天使が「恩寵を満ち蒙るもの」と生神女マリアに呼びかけ、神の子を生むことを告げ、「おめでとう、よろこべよ」と言ったのは、ルカ伝の 1 章に描かれる、いわゆる受胎告知、生神女福音の場面です。イコノスタスの王門に必ず描かれます。「救いの始まり」です。しかし、この救いは、イエスが生まれたよ、救われた、ハッピー、というものではありません。イエスは苦しめられ、最後には十字架に架けられ、死んで、墓に葬られました。でも、いま、3 日目に、天使は再びやって来て「爾の子、墓より復活した」と告げます。だから「また言う」、「慶べよ」なのです。マリアが神の子を生むことに同意して始まった救いは、今完成したのだ。「また言う、慶べよ」の深い意味が、突然、見えたように思えました。

歌詞のことばを調べながら、ことばと音楽を結びつけていると、そういうことが時々起こります。聖神が教えてくれるのだらうと思います。だから、できればよりも、その作業が大切なのではないかと思います。

正教会の聖歌は 1000 年以上前に聖師父たちが聖神に教えられて作り、歌い、教会から教会へと歌いつがれてきたものです。教会の聖歌者の仕事は、伝えられたことばを伝えられたメロディにあてはめる職人です。

伝統の音楽とことばを扱うとき、このことばに教会が何を教えているのかを考えて試行錯誤するとき、聖師父にインスピレーションを与えた聖神が、再び働きます。どう歌うかは自然と示されます

Slide 17-18

今日は最後に、アメリカやフィンランドで広く歌われているワラーム修道院調の「神の使い」を最後にご紹介します。覚えやすく、楽しい歌です。19世紀にバラキレフが合唱に編曲したものがポピュラーで、仙台教会ではマトフェイ土田さんのアレンジで歌われています。

私は20年ぐらい前にアメリカで聞いて、歌いたいと思いました。それから、ああでもない、こうでもないとして、作曲の専門家にもアドバイスを聞いて、教会のみなさんと歌ってながら5年ほど前にやっと、まあ、これで行こうかと言うものができました。小さな教会でも気軽に歌える単音聖歌にしました。大阪では即興でハーモニーをつけて歌っています。楽譜付きの動画をYouTubeに上げました。

正教の伝統聖歌には楽しい歌がたくさんあります。祝いの歌です。楽しく歌いましょう。降誕祭のコンダクだって、いまは「いま～処女は～」がよく歌われますが、2-30年前までは3調トロパリの「いま童貞女は永在の主を生む」が一般的だったそうです。これだけでなく、ことはありません。日本はまだまだ伝統を作る段階です。

「人々よ、楽しめよ」ですから。